

『六三教室』一九五三年九月（新教育協会）

教育人間像の一つのテーゼ

上原専祿
宗像誠也
『日本人の創造』

戦後新しい時代に入って、新しい人間像といふことがいわれるようになったが、正直のところ、教育者にはピンとこないのである。教育勅語のほうがかくに迫力があつた。民主的、社会的、自主的、合理的というような形式的な規定では、具体的な場に即して生きて働かない。これはわれわれがただ言葉として理解しているからであつて、生活のなかから育てあげたものでないからであらう。だから教育もまた觀念的に言葉を教えるにとどまつてしまう。

人間像などというものは言葉ではないので言葉と同時に直観的にピンとくる内容が問題であらう。現在人間像に関していわれているものもろの理想的な言葉が、われわれの肉体で感じられるようになるには、おそらく相当長い歴史的時間を必要とするのではないだろうか。それは現実生活の一つ一つの場で、われわれはこの場合、民主的、自主的であるためには、どうすればよいかということを考えてゆき、それを

積みあげていってそうなるのである。これは最も具体的な場で、最も理念的なものを把握するということであらう。いいかえれば、それは世界的立場で近代的人間像の理念をもつて現在を批判するということであらう。それには大きく人類の歴史を巨視的に眺めて、その系列で人間像をとらえていることが必要であらう。こう考えると結局のところ、われわれに新しい人間像がピンとこないのは、世界的理念によって自分が行動してゆくことができなかつたからである。それは日本人が世界史から目を覆われていたということであり、日本の民族社会が世界への扉を開いていなかつたということであらう。

『日本人の創造』という対話篇はちようどの蒙を啓くものである。これは上原教授と宗像教授の対話の形式をとっているが、ヨーロッパ経済史の権威で、しかも中世から近代への生活発展を幅広くとらえて豊かな教養をもつておられる上原教授と、近代的センスの豊かな宗像教授によって試みられたのは現在の日本の教師諸氏にとって恰好の贈り物といわなければならないまい。

では一体どういう展望と省察がなされ、どんな論定が行われているか。まず第一に漠然たる人間性をもつと的確にしてゆくには、現在日本の当面している歴史的・社会的な問題をできる

だけはつきりさせる必要がある。そうして願わくば子供たちをこの課題の熱心な担い手としたい。従来の日本人の消極性と卑屈さを克服して積極的にはたらきかけるといふことが必要で、そのきびしい創造的な努力といふことが近代的人間といふものの性格でなかるうか。これは大切な見かたで、人間像といふものを子供の毎日努力する課題のなかにとらえようとしていたのであつて、教師に考えて欲しいところである。（第一話）

では日本人の課題は何かというと、これは近代人の世界的視野において眺められねばならぬ。そこで、まず近代人の歴史的浮彫りが上原教授によって語られる。自我意識、合理的精神、ヒューマニズムの発展が古代から中世を通して近代に至るプロセスが述べられ、そこから近代人が鮮かに浮彫りされる。（第二話）

さてこういう巨視的人間像から日本人の現実が反省される。これはきびしい反省でなければならぬ。近代化されない、合理精神の欠如した、人間精神の進歩に対する確信のないみじめな日本人、あらゆる人間社会を家族制度の擬制のなかに包んでいるごまかし、人格といふものについての原始的な思想。これは教育に対して普通に考えられているより遙かに深刻なものを課しているといふべきであるまいか。これは教育に対する期待が大きいことでもある。

(第三話)

次は宗像教授によって主として明治以後の教育の方向に対する反省がなされる。日本の近代教育における合理主義の限界、非人間的道德教育、敗戦後の教育の歴史的課題意識の欠如、そこからくる新教育の末梢的技術性等は要するに真の近代的性格のないところに表皮ばかりをかぶったあやしげなものではないか。これも悪循環といえよう。(第四話)

そこでわれわれは教育の基本的課題をはつきりと与えることができるよう、第一には日本人の一人一人を近代人にまで教育すること、第二に政治的倫理的視点から考えると日本人の一人々々を民族の一員にまで教育すること、第三に世界の事情と日本のそのなかにおける地位という点から、日本人の一人一人を人類の一員にまで教育すること、これが基本的なものである。このうち、第一の問題については子供ばかりでなく、子供を育てる親の教育問題がある。しかしこれはおそらくむずかしい仕事ではないか。(第五話)

では民族共同体意識の形成はどう考えるべきか。いままで日本人はロクなことをやらなかったという認識にたつて、民族共同体を意識してゆくがいい。ということは、日本人が近代人、人類の一員として自覚するということでもある。これはリアリズムの極致ともいえようし、

理想主義ともいえよう。(第六話および第七話)

かくして当然に世界平和の問題を自分自身の問題として積極的に意識し、かつそのなかに入りこんでゆかなければならない。だがそれが具合が悪いなどと教育の世界で現在考えられてはいないか。この最高の理念をわれわれが八千万人の真剣な翹望とするべきではないか。(第八話、第九話)

しかしそれにはみずから進んで苦しい道をゆく覚悟がいる。これは資本主義か共産主義かなどという抽象的な問題でなく、もつとリアルな、どうすれば日本国民が食ってゆけるかという自主的な問題、絶対的な自立の精神に徹するということであろう。これは東洋的寛容の精神と通ずる。(第十話)

以下教育的態度、教育と政治、逆コース批判、社会科と歴史教育、平和教育再論が以上の根本理念に従って展開される。これは現在の教育人間像の問題に対してなされた一つのテーゼであるともいえよう。もちろん別な考えかたもあるのであるが、これはこれとして多くのひとびとに読まれ、真剣に検討されるべきものである。(東洋書館刊)

(矢口新)